

教宣 せぶん

九州の先輩

1月12日の地位確認訴訟の結審には、私たちの応援団が131名も集まってくれました。当然103号の大法廷でも入りきれませんでした。結審後、私たちは3班に分かれ、近隣支店宣伝行動に出かけました。そして夕刻再び合流し、報告決起集会に臨んだわけです。この原告団の行動とまったく同じ動きをしてくれたOBの方が何人かいました。道行く人に頭を下げビラを配り、足が棒になりかけるなか旗を持ち続け、会社の暴挙を訴え続けてくれました。ありがたいことです。

そのなかでも、遠路はるばる九州から、わざわざやって来てくれた先輩がいました。決して若くはありません。原告団に、かつての分会の仲間がいるわけではありませんし、とりわけ親しい仲間が原告団にいるわけでもありません。にもかかわらず、2泊で15,000円のウィクリーマンションを借りて、単身でこの日の行動に参加してくれたのです。もちろん、交通費・宿泊費すべて自腹です。

また、この先輩の支援カンパの額は並外れています。3回に分けて多額のカンパをしてくれています。報告決起集会で提言があった「株主になって要請団を株主総会に送り込もう」という運動にも、快く協力してくれると言ってくれました。決してお金が余っているわけでもありません。それはウィクリーマンションを借りることから容易に想像できます。「帰っても部屋が冷たいんだよ」と言っていました。「このたたかいに勝利して欲しい」という一念だけで、これだけの「支援」を私たちに行ってくれているのです。

この日、報告決起集会終了後、懇親会を行ないましたが、九州男児らしく最後の最後まで、楽しそうに付き合ってくれました。深夜、行き先の違う3人でタクシーに乗ることになりましたが、2番目に下りたこの先輩は、「最後の若者に代金を支払わせてはいけない」と言って、持っていたありったけの小銭をも運転手さんに手渡したそうです。

人間の価値とは「地位」や「名誉」では決まりません。けっして「収入」でも決まりません。東京海上日勤の経営者は「地位」も「名誉」も「収入」も手にしているのですが、働くものの「生活」や「雇用」を、露骨にそして巧妙に、破壊しようとする姿に、もはや「人間的な価値」のカケラも感じることはできません。私財を投げ出し、小銭まで投げ出し、手間を惜しまず、見返りのないたたかいを支えてくれようとしている先輩の姿とはまさに対照的だと言えます。後輩のために小銭まで投げ出した先輩の姿に、このたたかいは負けられないとあらためて誓いました。